

今年の春は、Love White Shirt

「つくる」と「着る」、ものと人との交差点が生み出すかたち。
京都発、これからの白シャツ・スタンダード モリカゲシャツキョウト 京都府京都市

白シャツにしよう

Good and Ordinary

「地味でもいいから、お客さんとかちゃんと向き合つて満足してもらえ
るものを提供し
ていかなければ
ならないと思う
ものもの

るものを提供し
ていかなければ
ならないと思う

カゲシヤツキョウト」の目指すシヤツはあくまで生活に密着したシヤツ。開放感のある店内には、肩肘を張らずにノーネクタイでも着られるようなシヤツが並ぶ。

「いくら素敵なもので、洗濯が
できなかったり、着心地が悪かった
りすれば結局長く着ることはできな
いじゃないですか。だから特別な
ものとしてではなく、道具のよう
な、日常着としてのシャツを作り
たかっ
たんです」

正装のときだけに使うものや、扱いに困ってしまうほどデザイン性に特化したものではなく、着やすさや耐久性といった、着る人が生活していく上での便利さを第一に据えたものづくりをしている。

イメージ先行で、デザインを重視する「ファッション」が幅を利かせ

る現代の日本において、シャツは「着る道具」だという考えは、森蔭さんがシャツに魅せられている理由にも通じている。「シャツって機能のかたまりなんですよ」そういつて成り立ちを教えてくださいました。

「もともと大昔のヨーロッパではTシャツが長くなったチュニツクのようなものを着てはったんです。でもそれだけじゃ風が入ってきて寒い。だから防寒のために襟を付け、カフスを付けるようになっていったんです」

シャツの条件というのは台襟、カフス、前立ての三つ。

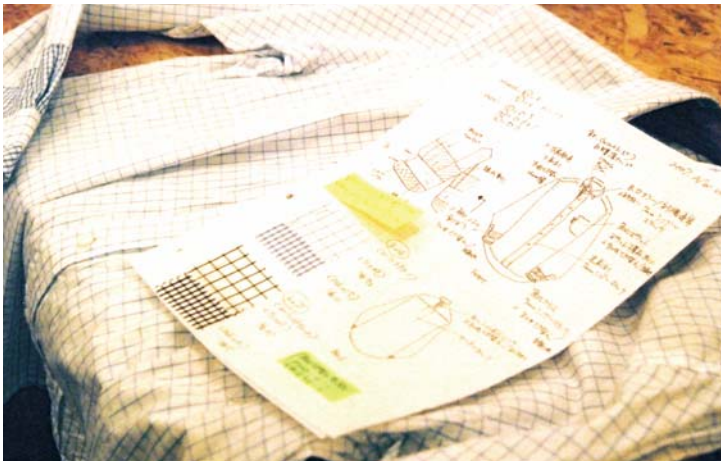
「防寒という機能から始まってデザインは後から。形は変えようがないものなんです。こういう機能美と成り立ちのストイックな面が好きなんですよ」

小さいころから、グラフィックデ

ザイナーの父の影響もあって、
”
「理系

二次元のものが
三次元になることに興味をもつてい
た。ただ、その対象はもっぱら洋服
「これがフィギュアとか電化製品と

細部に至るまで指示の入った、こだわりのデザイン画と、実際に出来上がったシャツ。



かに向いてしまっていたら、まったく違う人生になってしましたよね」と笑う。はき古したジーンズを解体してみたり、気に入ったシャツを分解して型に起こし、違う布で作ってみたい、ということとを繰り返すうちに自然と服飾関係の道を歩み始める。「だから、いわゆるフーリングの世界でファッションが好きな人と違って、僕はどちらかといえば理系。平面の型紙があって、それを組み立てると『あ、こうなるんだ』っていう洋服の構造的部分がおもしろかったんですよね」

”
「理系」デザイナー

Science Designer

思い浮かんだキーワードを書きとめたノートは、いわば〈モリカゲシャツ〉の素。これをデザイン画に反映していく。思いどおりの生地が手に入らず、特別に注文することもしばしば。



ショップの二階にある工房。オーダーメイドと修理の一部はスタッフの手で行われている。

” Behind the Scenes

洋服作りの裏側を目の当たりにして

いうことに”

専門学校卒業後の一九九三年、同級生の

東京での学生時代には、アパレル業界のいわば一番「川上」にあたる、生地屋さんでアルバイトをする。そこで目にしたのは、作っている場所と売っている場所、そして作っている人と買う人のつながりの希薄さだった。

「布を納品に行くと、そこは近所のパートのおばちゃんがおしやべりしながら働いているような町の工場なんです。お昼どきだと、『一緒にごはんどう？』みたいな。でもそこで作られたものが売られているショップは、表参道とか青山みたいな一等地にあって、すごくおしゃれな空間。売っている店員さんもお客さんも、まさかそんな場所で作られたなんてまったく知らずに売って、まったく知らずに買って着る。それってどう

なのかなって」

時代はバブル崩壊前の絶頂期。どんどん作って、どんどん売っていく風潮が蔓延していた。「もう前シーズンの古いものは着るな、みたいな感じでしたよ」

ファッションブランドはどれもみな、いかに斬新なデザインで、いまままでにない方向を打ち出せるかを競っていた。そして着る側にとっても、次々と新しいものを手に入れ、消費していくことが「ファッション」という感覚が定着していった時代。

「洋服は着たら洗わなくてはいけなののに、そんなことはデザインする上でみんな考えていない。だから、たとえば綿素材の中に一か所だけシルクを入れて、最後に『これ（洗濯表示は）どうする？』『ドライ！』と

ほとんどが大手のアパレルメーカーに就職するなか、森蔭さんは京都でひっそりとオーダーメイドの店を始める。

「このときはまだシャツというわけではなく、頼まれればなんでも作っていました。たとえば、ウエディングドレスなんかも」この店を三年ほど続けていくうちに、客から自分で作って着ていたシャツをほめられたのがきっかけで、「シャツ」そして生まれ育った「キョウト」というキーワードが結びついていった。

「僕にとつての東京は、あくまで住むだけの場所。それに対して京都は『住まって商う』のにちょうどいい場所でした。（モリカゲシャツキョウト）と聞けば、モリカゲという人がやっているシャツ店なんだというこ

とがすぐにわかるし、たまたま京都出身だったこともあって、キョウトとつけたら見つけてもらいやすいかな、と」

たしかに、シンプルでわかりやすい。「ここでもしか手に入らない」、そして「専門店である」という特別感をかもし出す絶妙なネーミング。補助的なメタファーとして、歴史を背景とした「堅実なものづくり」というプライメージをもつ「京都」。



ひとつのパーツの型紙にもたくさんのバリエーションが用意されている。

森蔭 大介 もりかげ・だいすけ

1970年京都生まれ。文化服装学院二年服装科卒業。93年にオーダーメイドのアトリエショップを始め、97年にMORIKAGE SHIRT KYOTOを立ち上げる。05年に現在の地に移転オープン。休日にはよく見て回るという建築物や雑貨も、どこか遊び心のあるデザインの源。

シャツのデザインは、今もすべて森蔭さんが一人で行っている。その根本に据えられているコンセプトは、客に求められるものを作る、ということ。

「受け入れられることと、買っていただくことから絶対に逃げてはいけないと思っています。そのためにはどうしたらいいのか。ただ作りたいものを作っているというのではなく、売り方も考える。そういう意味で半分は商売人なんですわ」

いろいろなところから卸しの話も

受けるが、昔から続いている顔の見える売り方にこだわる。誰が作って誰が買ったのかがわかる、という客にとつての安心感も（モリカゲシャツキョウト）をかたちづくる大きな要素のひとつでもあるからだ。

「うちのシャツはたたみにくいんです」多くの場合、きれいにたた

んでたくさん陳列できるようデザインされているのに対して、（モリカゲシャツキョウト）のラインはふんわりとしていて立体的。ハンガーにか

けてあっても、まるで中に人が入っているかのような丸みを帯びている。『デザインするときは着続けてもらうことが前提。家に帰ったら脱いで、洗濯機に放り込んで、『ピッ』ってでさなくちゃしんどいじゃないですか』

洗濯やアイロンかけといった扱いやすさの面でも、着てもらえる状況を生み出すことが服を提供する側の責任と森蔭さんはいう。

” 商売人半分、デザイナー半分

Business and Design

月に一度のペースで新作を発売しているが、裁断したあとの生地のはギレやボタンはすべて保管し、修理に对应する。着続けてもらうことを前提に、繰り返し洗う洗濯に耐えうる強度の生地を使うことはもちろん、ボタンだけ浮いてしまわないよう、一緒に風合いを重ねることのできる天然素材を使うといったこまやかな配慮までもなされている。また、着なくなったものを藍で染め直すプロジェクト「elobe」も展開している。

「藍染めというのも修理の選択肢のひとつ。エコプロジェクトとわかりやすく言っているけれど、ムダをまったく省くことはできないし、第一ムダのない生活なんて楽しくない。ただ、同じように町で楽しく生活するにしても、少しは地球にやさしいほうがいいんじゃないでしょうか、という提案です」

十年以上変わらず、同じスタンスでシャツだけを作りつづけることに対して、迷いはないのだろうか。

「卸し以外にも、他の場所への出店の話をいただくことはたくさんあります。それを受けて、事業を拡大させるほうが楽かもしれない。けれど、それではお客さんの顔が見えなく

” 楽しくなければ意味がない ”

Enjoy Yourself

なってしまう。ただ消費されてしまいうのは（モリカゲシャツキョウト）ではなくってしまふんです」
もちろん、より多くの人に着てもらいたいという気持ちはあるが、あくまで着る側と作る側のサイクルの保たれる範囲で、ふつうに受け入れてもらえるものを作りたい。目指すは「インディペンデントだけど、すぐくメジャー」なスタイルという森蔭さん。一見とてもシンプルだが、とても難しい挑戦だ。

「ミニマムなものはどクオリティですね。見えないところに手を入れて、着てもらったときにどうわかってもらえるかというところに白シャツの難しさがあると思うんです」

多くの人から望まれて、受け入れられて、結果として定番となったもののだが、表面的な主張は何もない。ただ、着続けることでにじみ出てくる良さ。（モリカゲシャツキョウト）がとてもスマートに成り立たせてしまっている、洋服とそれを着る人との対等な関係。さらに両者が交わることで生まれる楽しさ。

よそよそしい既製服にあふれかえる世界の中で、森蔭さんの作り上げる白シャツは、忘れかけた真実を体現しているかのようだ。

春風が吹いたらシャツを着よう。

真っ白で、しっくりとはまるあのシャツを。

何度季節がめぐったとしても飽きることなく、

着れば着るほど好きになっていく。

芽吹く草木、心地よい木もれ日。

何か始まる季節には

やっぱり白シャツが似合う。



MORIKAGE SHIRT KYOTO モリカゲシャツキョウト

〒602-0877 京都市上京区河原町通り丸太町上ル樹屋町362-1 TEL 075-241-7746 <http://www.mrkgs.com>